特別研修

月例研究会　議事録（　１２　月）

２００８ 年度第　６　回

報告題名：農食品の安全性確保および管理体系強化方案に関する研究	
報告者：徐杭希	**日時**　12 月 18 日　15 時から 17 時
（**所属分野**）　経営情報	**場所**　第八講義室
座長　小山田	**議事録担当者**　八木
出席者　米倉、冬木、川島、工藤、伊藤、長谷部、木谷、石井、大村、佐藤章夫、澁谷、小山田、張、池田、飯塚、田口、松井、スチン、祖、八木、柳瀬、神浦、野村、福田、水木	

報告要旨

本研究は、農食品安全性確保および管理体系強化方案に関する研究である。

農食品の安全性は外観で判断するのは困難であるため、生産・加工段階は勿論、流通過程においても 徹底した安全性の確保が重要である。

それゆえ、本研究ではまず、韓・日両国の農食品安全管理体系の現況と関連法律を分析し、問題点や課題などを明らかにする。その上で、消費者に安全・安心な高品質の農食品を供給するための安全システムの体系的な管理、消費者の信頼性の確保およびリスクの管理方案などを検討する。同時に、国民の福祉増進と農食品産業発展のために農食品安全性関連体系の改善方向を模索する。 今回の報告では韓国を中心に検討する。

質疑・応答

渋谷：現在韓国では、食品の安全性に関するリスク評価とリスク管理を同じ部署が担当して行っているが、今後食品安全政策委員会が設置されると、リスク評価は同委員会が実施することになるか。

徐　：12 月中に同委員会が発足する。発足してみないと、今のところ自分には分からないが、99%そうなると思う。

渋谷：リスク評価とリスク管理が一元化されている上での問題点は。

徐　：評価と管理は分離すべきだと考える。評価と管理がつながっていると、管理者が評価を下すことになるため、評価に怠慢が生じる。

渋谷：日本ではＢＳＥ問題に関して、リスク管理と評価を農林水産省が両方とも行っておくべきだったと言われている。韓国では、何かそういった事故は起きているか。

徐　：豚肉の内臓をハムの原料として使った問題が起きた。生産段階を管轄する農林水産食品部と、流通・輸入段階を管轄する保険福祉家族部の二つの部署で、互いに責任をなすれつけあう問題となった。

佐藤：日本では、食品の安全性を高める事業は、高値で農産物が売れる利点がある一方で、高齢の農業者にとっては管理作業が大きな負担となってしまうため、農業離れを助長してしまう。韓国では、どのような現状か。

徐　：国の機関において、現在研究中。特に、70-80 代の高齢の方には、安全性を高めるための対応は難しいものがある。50-60 代の方々への指導を努力中。

佐藤：安全性を高める上で、トレースアビリティをつける作業の労力が大変。また、禁止されていた農薬が万一散布された場合に備えて、保険をかけておく必要も生じる。安全性を高める事業は、農業者にとっては、時間がかかる上に、お金までかかる。また、そういった作業を行わないと農産物を購入してもらわない。このような現状が日本にはあるが、韓国はどうか。

徐　：安全性を高めた農産物は、高い値段で販売することが出来る。頑張れば販売できるため、50-60 代の方は一生懸命やっている。70-80 代の方は、売れるよりも楽をしたいため、そういった作業はあまり浸透していない。ただし、決められた作業を怠った場合は、違法となるため、ばれれば罰金となる。

長谷部：日本と韓国の比較をして、それからどうするのか。

徐　：相違点を見て、どこが良くて、どこが悪いのかを良く考えて、韓国の今後の政策の方針を模索する。

長谷部：相違点が出るのはなぜかといった問題も考えてみるということですか。

徐　：日本では、農林水産省と厚生労働省がリスク管理を行い、食品安全委員会がリスク評価を行っている。韓国では現在、農林水産食品部と保険福祉家族部の二機関が食品の安全性に取り組んでいるが、これに、これから食品安全委員会が加わる。三機関での食品安全性の取り組みのありかたに関して考えていかねばと考える。

米倉：韓国の食品安全性の問題で、課題となっているものは何か。具体的な課題を設定したほうが良いのでは。

徐　：ありがとうございます。